



桑の木を伝って朝日が昇ってくる

梅澤北明(ライター)

桑は神木である、という概念が古代中国にはあつたらしい。無論、そここに生えている桑の木が全て神木であるわけではない。「扶桑」とよばれる特別な桑の木である。東の海上にこの桑の神木・扶桑が一本生えている。日々の朝陽は、この海上にそびえ立つ巨大な神木を伝って昇ってくるという。転じて、扶桑はその神木が生えている土地、すなわち日本をさすことにもなった。桑の木を伝って朝陽が昇ってくる、とはなんと愉しい図だろう。想像をさらに逞しくすると、さながら太陽は光り輝く蚕といったところか。桑が東の海上に屹立する神木に見立てられているのは、『説文解字』とよばれる古典中においてだが、これより時代をさかのぼった『列子』にはもっと荒唐無稽な世界観が現れてくる。やはり東の海原の果てに帰墟とよばれる底なしの谷がある。ここには世界のすべての河川、すなわち地上の大河はいつにおよばず、天の銀河ですら流れ込む。この巨大な谷には浮き島が五つあり、一つの島を巨大なウミガメ三匹が六万年交替で支えている。ところが都合十五匹のウミガメのうち、六匹がある日巨人に連れ去られた。五島のうち支えるものがなくなった一島は漂いだし、やがて北極に没してしまったという…。なんとも人をくつた話である。世界観、あるいはパラダイムに飛躍と誇張とユーモア、そして不思議なことに奇妙な秩序性がある。さて、扶桑の国に住む読者は、世紀の変わり目の朝陽が「よじ登ってくる」さまをどのような思いで身振りされたであろうか？